

キタキツネのキキ

6

作 なかむら よしひろ

くらのやみにだんだん目がなれてくとトトの姿が見えるようになりました。トトはくわえていたネズミをポトンと落としました。

「これは、よく太ったつまそうなネズミだ。キキ、お前が先に食ってみな」トトはこう言って自分の鼻先でネズミをキキの方に押しやりました。キキはずっと前にお父さんがネズミをとってきて食べさせてくれたことを思い出しましたが、味までは覚えていません。よく見てみるとネズミは毛むくじやらでとても食べられそうにありませんでした。でも、いらないうって言ったらかきとトトが怒るだろうと思つてキキは目をつぶってネズミをくわえました。ネズミはまだ生あたたかく、びっしりと生えた毛がキキの舌にチクチク刺さります。思わずはきだしそうになりましたがトトがじつと見ています。キキは思

いきつてかんでみました。するとネズミの体から生臭い血が出てきて口の中一杯に広がりました。キキはむせてとうとう吐きだしてしまいました。

「ごめんなさい、トト。ぼく、これ食べられないや」トトはちよつとムツとして「人間から変な食べものをもらっているから、俺たちキツネにとつては大のこちそうを食べべられなくなるんだ」そしてトトはあつと言つ間にネズミを平らげてしまいました。「ああ、食つた、食つた、さてデザートにするか」

トトは穴ぐらの奥の方からなにかを口にくわえてきました。「さあ、これなら食べるだろう」それはミヤマクワガタとエゾカミキリでした。

「どつちでも、好きなほうを食つていいぞ」とトトがすました顔で言います。そう言われたもののキキにはどちらも食べられそうには見えません。でもさっきのネズミのこともあつし、これを食べないとついたらそれこそトトにかみつかれるかもしれせん。それでほんの少しだけ小さいカミキリをえらびました。くわえてみるとネズミの毛よりもつと固いカミキリのあしが舌に引っかかります。思い切つてかんでみると、ま

た何か汁が出てきました。キキはビックリしました。こんなに苦いものをこれまで食べたことがありません。でも吐きだしたら叱られそうなのでキキは一気に飲み込もうとしました。ところがのどにカミキリのあしが引っかかつて飲み込むことができません。吐きそうになるやら、息は苦しいやらでキキが目を白黒させているのをトトがおもしろそうに見ています。やつとのことでカミキリを飲み込んだキキにトトが言いました。

「お前は本当にだめなやつだなあ、このままだと冬にくろうするぞ。おれがキツネの食べものを教えてやるから、毎日ここのまでやつて来い、いな。」そして「さあこれなら、食べるだろう」と言つて出してきたのがオニグルミの実でした。

また変な食べ物だったらいやだなあと思ひながらキキはオニグルミを見ました。それはネズミのようにごわごわの毛は生えてないし、カミキリのようにとげとげの付いた長いあしもありません。ちよつと青くさいにおいがありました。なんとか食べられそうです。そして口に入れてかもうとしました。でもその固いこと、歯がおれそうでした。

奥歯でくわえて思いきり力を入れるんだ、いいか、見てるよ」

「カキン」トトの口の中でいい音がひびきました。トトがオニグルミを口から出すと、それは見事にまつ二つにわれていました。キキも奥歯にはさんでぐつとかみました。それでもまつたく歯が立ちません。トトはあきれた顔をして、さっき自分がわつた半分をキキに分けてくれました。オニグルミの実はおいしくはありませんが、さっきのネズミやカミキリに比べたらずっと食べやすかつたのでキキは安心しました。

散歩に出たからさういふん時間がたつていました。お母さんが心配していることでしょう。それにこれ以上ながいをしてまた変なものを食べさせられるかも知れません。

そこでキキは、「ごちそうさま、それじゃお母さんが心配するといけないからもう帰るね」

こう言つてトトの巣から外に出ました。後ろから、トトが「おう、明日から毎日来るんだぞ」というのが聞こえました。でもキキは、あんなまずいものを食べるためにわざわざこんな遠くまで来るものかと思つていたので。

(3月号へつづく)